

## アプシス装飾としての「オランスの聖母」

—— 中期ビザンティン聖堂装飾プログラム論<sup>(1)</sup> ——

益田 朋幸・辻 絵理子

### 1. キオス島の修道院ネア・モニの装飾プログラム

エーゲ海の東、小アジアの海岸から遠からぬところに浮かぶキオス（ヒオス）島を訪れる日本人は多くない。それでも島を訪れる者は、ドラクロワの《キオス島の虐殺》（1824年、ルーヴル美術館）で名高い、1822年のオスマン・トルコによる島民虐殺の史跡に足を運ぶだろう。美術史の上からは、キオスは11世紀建立の修道院ネア・モニの島である。

ネア・モニΝέα Μονή（「新修道院」の意）は1042年以前に、島に暮す隠修士ニキタス、ヨアニニス、ヨシフによって聖母マリアに献堂され、とくにビザンティン皇帝コンスタンティノス9世モノマコス（在位1042-55年）の庇護を得て栄えた。内部の壁面を飾るモザイクは、D・ムリキによれば1049-55年の間に制作された<sup>(2)</sup>。

建築は、中期ビザンティンに一般的なギリシア十字式（内接十字式）ではなく、特異な構造である。エクソ（外）・ナルテクスは南北に半円形に張り出す形態をとり、3つの浅いドームを戴く。エソ（内）・ナルテクスの中央にもドームが設けられる。ナオス（本堂）はほぼ正方形のプランをもち、四隅だけでなく計8つのニッチ状のスクィンチを切ってドームを支える。東には主副3つのアプシスが設置されている。

主アプシスにはオランスの聖母立像（図1）が配され、北南の副アプシスには大天使ミカエルとガブリエルの半身像が置かれる。ドームを支える8つのスクィンチには時計回りに、「受胎告知」（北東）、「降誕」（東）、「神殿奉献」（南東）、「洗礼」（南）、「変容」（南西）、「磔刑」（西）、「十字架降架」（北西）、「冥府降下（アナスタシス）」（北）のキリスト伝8主題が並ぶ。ドームにはパントクラトールのキリストが描かれていたことが確実であるが、崩落して現在図

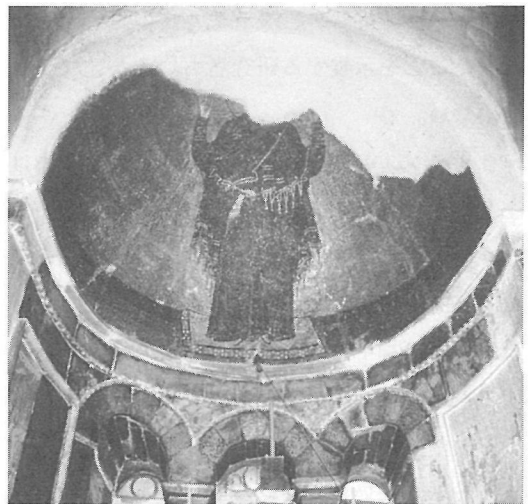


図1 キオス島、ネア・モニ修道院アプシス

像は残っていない。

ナルテクスには「ラザロの蘇生」(北東)、「エルサレム入城」(北ヴォールト南側)、「洗足」(北ヴォールト北側)、「ゲツセマネの祈り／ユダの裏切」(南ヴォールト南側)、「昇天」(南東)、「聖霊降臨」(南ヴォールト北側)の各主題が配されるが、これらはナオスに比べて作行きが格段に落ち、異なる作者の手になるか、時代が下る可能性もある。ナルテクスのドームには聖母が描かれていた。エクソ・ナルテクスに図像はない。

この時期のビザンティン美術は、<sup>ドデカオルトン</sup>十二大祭と呼ばれる12の重要なキリスト伝を軸に聖堂装飾を行うようになった。大局的に見れば、ネア・モニも十二大祭を中心に、いくつかの情景を加えて堂内を飾っており、同時期の修道院オシオス・ルカスやダフニ等とも大きな違いはない。8つのスキニチの「磔刑」と「冥府降下」の間に選ばれたのは「十字架降架」であるが、12世紀の聖堂であればこの場に「トレノス(聖母の嘆き／ピエタ)」が来たかもしれない。ビザンティン美術が「トレノス」の重要性に目覚めるのは、12世紀半ば以降のことである。一点注意を喚起しておくべきは、「キリスト昇天」の配置である。「昇天」は9世紀を境に、それまでのドームから、ペーマ(聖域)の天井に場を移している<sup>(3)</sup>。ネア・モニの「昇天」がドームでもペーマ天井でもなく、ナルテクスに置かれるのは異例である。

中期ビザンティン聖堂のアプシスは、9割方聖母子(坐像／立像)で占められる。聖母子は不可視の神の「受肉」を表象する主題である。ネア・モニのようにオランスの聖母立像をアプシスに描くのは、稀である。D・ムリキに従って、アプシス図像としての「オランスの聖母」を概観すれば、以下になるだろう<sup>(4)</sup>。初期キリスト教の殉教者記念堂において、タイトル聖者のオランス像がアプシスを飾ることはよくあった<sup>(5)</sup>。このヴァリエーションとして、イコノクラスム以前から、アプシスに「オランスの聖母」を描くことは稀ではなかった。イコノクラスム前のコンスタンティノポリス、ブラケルネの聖母聖堂アプシスに同図像が描かれており、大きな影響力をもったことを示唆する研究者もいるが、ブラケルネのアプシスについては信頼できる具体的な記述がない。

「オランスの聖母」の機能についてムリキは、戦勝祈願等の寄進者の願いをドーム(=天)のキリストに伝える「とりなし」であると考えた。1028年の銘文をもつテサロニキ、パナギア・ハルケオン<sup>(6)</sup>は葬礼的性格の強い聖堂で、その場合アプシスの「オランスの聖母」は、埋葬者の魂の救済をキリストにとりなすことになる。いずれの場合も、聖母の両手を広げるオランスの挙措は、天上の神キリストに対するとりなしを意味するとムリキは主張する。私たちはこの説に反対するものではない。しかしムリキが見逃したもうひとつ別の読みとりをここに提案する。

その前提として、ビザンティン聖堂装飾における「イコンとナラティヴ」の問題にまず触れよう<sup>(7)</sup>。聖堂という三次元空間に種々の図像が配されることによって、各図像一点一点がもっている意味に加えて、図像間の関係性によって新たな意味が生じる。説話的な図像がイコン(礼拝像)

的にも読まれ、またイコン的な図像に説話的な意味が生まれる場合もある。たとえばクルピノヴォ（マケドニア）の聖ゲオルギオス聖堂（1191年）西壁では、「聖霊降臨」、「日の老いたる者のマイエスタス・ドミニ」、「変容」という3図像を並べることによって、メタレヴェルで「聖霊—父なる神—子なるイエス・キリスト」という「三位一体」の教義をも表象する<sup>(8)</sup>。ネレヅィ（マケドニア）の聖パンテレイモン修道院（1164年）は主アプシスに聖母子（逸失）、南北の副アプシスにそれぞれ洗礼者ヨハネ、聖母マリアを描くことによって、3アプシスのプログラムが「デシス」となる<sup>(9)</sup>。

ネア・モニにおけるドームのパントクラトールと、アプシスのオランスの聖母は、メタレヴェルで「キリスト昇天」を表象するというのが私たちの解釈である。通常のビザンティン聖堂では、ドームのパントクラトールがキリストの神性を強調し、アプシスの聖母子がキリストの人性（受肉）を表し、もって神の両性論を語ることになる。しかしネア・モニはドームとアプシスを併せて、すなわち聖堂空間全体をもって、キリストの昇天と再臨という終末論的なキリスト論を語るのである。

このような読みとりが可能であるという傍証を2点挙げる。クレタ島レティムノン近郊ミリオケファラ村バナギア聖堂では、ドームのパントクラトール坐像の東側に、大天使に挟まれた聖母が描かれている<sup>(10)</sup>。もともとドームは「昇天」の場であったが、9世紀を境としてパントクラトールにとって代わられる<sup>(11)</sup>。しかしパントクラトールとなっても、「昇天」の名残があり、しばしば「オランスの聖母」という「昇天」に由来するモチーフが附加される<sup>(12)</sup>。ネア・モニの失われたドーム図像がキリストの胸像であったか、坐像であったかは不明であるが、どちらであってしまかまわない。パントクラトールと「オランスの聖母」という、ともに独立したイコン的な図像は、組合わせられたときに観者の意識に「昇天」の含意を想起させることになる。聖堂空間全体が、「昇天」の展開する場となる。

もう一点は、今は失われているネア・モニのベーマ天井図像である。ムリキは確実にここには「<sup>エティマシア</sup>空の御座」があったと言う<sup>(13)</sup>。「オランスの聖母」とパントクラトールの間に、「空の御座」が挿入された場合、いかなる読解が可能になるか。「オランスの聖母」は、昇天するキリストを地上で見送る役割を果たす。南北副祭室の大天使ミカエルとガブリエルは、昇天を見送る聖母を護持する機能を同時にもつ。大天使（「白い服を着た二人の人」使徒言行録 1:10）は語る。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」（使徒言行録 1:11）。

昇天するのと同じ姿でキリストは再臨する。再臨したキリストが就く裁きの座が「空の御座」である。「オランスの聖母」とパントクラトールの間に「空の御座」が配されることによって、「昇天」＝「再臨」というキリスト教的終末思想が見事に造形化された。図像はそれぞれの意味をもちながら、聖堂全体が壮大なキリスト論を描き出す。

ネア・モニのペーマ天井に接する狭い垂直壁面には、おそらく「デシス」があっただろうとムリキは述べる<sup>(14)</sup>。ムリキの文脈では、「オランスの聖母」同様に、ここでも「とりなし」が表されていることになる。私たちの解釈では、「空の御座」に隣接して「デシス」が置かれるプログラムは実に有効である。観者はここに「再臨」の意味をいっそう確実に読みとるであろう。同時に「デシス」の起源は聖域の守護にあったとする私たちの主張<sup>(15)</sup>からも、この配置は説明できる。オシオス・ルカス修道院（11世紀中葉）、オフリドの聖ソフィア聖堂（11世紀中葉）のアプシス附近に描かれた「デシス」も同様である。この「デシス」の原義をもっともよく伝える作例は、シナイ山聖エカテリニ修道院（6世紀）である。

ネア・モニのこの洗練された装飾プログラムに、手本がなかったとは想像し難い。皇帝コンスタンティノス9世モノマコスの寄進を得て、おそらくコンスタンティノポリスの職人が制作したモザイクは、首都の何らかの聖堂装飾プログラムを踏襲したものであろう。現在のイスタンブールに、ネア・モニを想起させる作例は現存しないが、文献から9世紀の首都に、「オランスの聖母」をアプシスに描く重要な作例が存在したことが伝わる。コンスタンティノポリス総主教フォティオス（在位858-67, 877-86年）による「第10説教」を見よう。

いちばん上の天井には色鮮やかなモザイクのかけらで、人のごとき姿が描かれ、キリストの特性を備えている。汝は言うだろう、彼は地上を見そなわし、秩序ある配列と統治を創り出す。形と色のみのこととはいえ、画家は正しく靈感を受けて、創造主の我等に対するご配慮を描き出した。半球の頂上に隣接するくぼんだ部分には、大勢の天使たちが、我等のともに戴く主に侍するさまが描かれている。聖域の上に立ち上がるアプシスは、聖母の御姿で輝きわたる。聖母は汚れなき御腕を我等がために広げ、皇帝陛下のために敵からの無事と功名とを勝ちとる。ひと群れの使徒たち、殉教者たち、そう、預言者たちも、さらに総主教たちも、聖堂全体をその姿で満たし荘厳する<sup>(16)</sup>。

この説教はビザンティン美術史研究において、長くネア・エクリシアの献堂（880年）に際し  
てのものだと考えられてきたが、ジェンキンズとマンゴによって、ビザンティン皇帝の宮廷礼拝  
堂であるファロスの聖母聖堂<sup>(17)</sup> 改築を記念したものだということが明らかになった<sup>(18)</sup>。年代は  
おそらく864年、皇帝ミハイル3世の寄進にかかるものである。中世の史料から、ファロスの聖  
母聖堂は小型の建築で、ナルテクスを有し、南北に副祭室を備えていたことがわかる<sup>(19)</sup>。総主教  
フォティオスの証言によれば、ドームにはキリストと天使たち、アプシスにはオランスの聖母、  
その他の壁面にはさまざまな種類の聖人たちが描かれていた。マンゴはさらに、ドームのキリス  
トは胸像ではなく全身坐像であり、天使は肋骨状に分割された区画<sup>(20)</sup> に配されていたと推測し  
ている<sup>(21)</sup>。

エクフラシスの例にもれず、フォティオスの雄弁は図像の再現にははなはだもどかしい。ベーマの天井やナオスのヴォールトには何が描かれていたのであろうか。キリスト伝に関する記述が説教に一切見られないところから、9世紀の時点でファロスの聖母聖堂には説話的な図像は施されておらず、コムネノス朝時代になってキリスト伝諸場面が追加されたと言われている<sup>(22)</sup>。そうであるならベーマの天井には、「昇天」が描かれていなかった。ドームのキリスト像が半身像であっても全身坐像でも、アプシスの「オランスの聖母」と併せて、そこに聖堂全体として「昇天＝再臨」というプログラムを読むことができる。ただし当代最高の知識人たる総主教フォティオスは、そのプログラムを理解していなかったようである。

キオス島ネア・モニの手本がファロスの聖母聖堂であったか否か、現物の残っていない今となっては議論しても詮無きことである。しかしアプシスに「オランスの聖母」を描くことによって、ドームのキリスト像と併せて、メタレヴェルで「昇天＝再臨」を表象するプログラムが9世紀の首都コンスタンティノポリスに存在したことは確認した。仮にファロスの聖母聖堂がネア・モニの画家に手本を提供したとしても、それはフォティオスの見たままの聖堂ではなく、追加装飾を経て堂内にさまざまなキリスト伝図像が配された聖母聖堂であっただろう。

結果から見れば、ファロスの聖母聖堂、そしてネア・モニのプログラムが中期ビザンティン聖堂装飾の主流となることはなかった。たとえば北ギリシアのカストリア、アギイ・アナルギリ聖堂（1180年代）は、アプシスのコンク上部にできた小さなヴォールトに「空の御座」を描いている。しかしコンクは「オランスの聖母」でなく、坐像の聖母子である<sup>(23)</sup>。ネレヅィ（マケドニア共和国）の聖パンテレイモン修道院（1164年）は、アプシス最下部、祭壇の背後に当たる位置に「空の御座」を描いている。アプシスのコンクはキリストのメダイオンを胸に戴いたオランスの聖母半身像であるが、これは16世紀の後補である。12世紀のアプシス図像は不明であるが、コンクが非常に狭いので聖母子の坐像や全身像は納まりにくい。現在の図像がオリジナルと等しいなら、ここに「オランスの聖母」－「空の御座」という主題連結を見出せる。ベーマ天井のオリジナル図像は不明である。このように部分的にネア・モニに近い主題群が現れても、全体としてネア・モニと等しいプログラムは現存しない。

## 2. アプシス装飾における「オランスの聖母」

イコノクラスム（聖像破壊運動、聖像論争。726～843年）以降のビザンティン聖堂は、ドームに所謂「パントクラトールのキリスト」<sup>(24)</sup>、アプシスに「聖母子」を描くことが原則となる<sup>(25)</sup>。パントクラトールは天に在る神キリストを、聖母子は不可視の神の受肉という教義を表象する。ドームとアプシスという聖堂で最も重要な場において、不可視の神が地上に現れたこと（受肉）、キリストには神性と人性があるということ（両性論）を語るものである。

例外的なアプシス・プログラムとして、「デシス」<sup>(26)</sup>、キリスト坐像（「マイエスタス・ドミ

ニ」)<sup>(27)</sup> 等のキリスト像を中心とするものもあるが、中期（9～13世紀）以降の聖堂の9割以上は聖母子図像で装飾された。聖母子像を分類するなら、聖母について坐像・半身像・立像の形式があり、キリストをどう抱くか、キリストが全身像・半身像・メダイヨンのいずれの形式をとるか、等でさまざまな図像が生まれる。そのうちのいくつかには「オディギトリア」「ブラケルニティッサ」「ニコピア（ニコピオス）」「プラティテラ」などの図像学上の名称が与えられている<sup>(28)</sup>。

ネア・モニのアプシスにおける「オランスの聖母」<sup>(29)</sup> は、例外的なプログラムではあるが、類例がないわけではない。私たちの知り得た作例をリスト化する。

#### アプシスにおける全身像の「オランスの聖母」作例

- ・キプロス島アモコストス Ammochostos 村近郊リヴァディア Leivadia、キラ Kyra 聖堂、6世紀（？）のモザイク（断片）<sup>(30)</sup>
- ・コンスタンティノポリス、ファロス Pharos の聖母聖堂、864年<sup>(31)</sup>
- ・キエフ、「デシャティナヤ（十分の一の）Desjatinnaja」聖堂、989－996年<sup>(32)</sup>
- ・テサロニキ、銅細工師の聖母 Panagia Chalkeon 聖堂、1028年<sup>(33)</sup>
- ・キエフ、聖ソフィア Svjataya Sofia 大聖堂、1043－46年<sup>(34)</sup>
- ・キオス島、ネア・モニ修道院主聖堂、1049－55年
- ・キエフ、ペチェルスキイ Pečerskij 修道院「聖母の眠り」聖堂、1083－89年<sup>(35)</sup>
- ・キプロス島カコペトリア Kakopetria 村、屋根の聖ニコラオス Agios Nikolaos tis Stegis 聖堂、11世紀？
- ・キエフ近郊、大天使ミカエル聖堂、1108年<sup>(36)</sup>
- ・ノヴゴロド、聖ソフィア Svjataya Sofia 大聖堂、1108年<sup>(37)</sup>



図2 カストリア、聖ニコラオス・トゥ・カスニヅィ聖堂アプシス



図3 プリレプ、聖ニコラオス聖堂アプシス

- ・カストリア、聖ニコラオス・トゥ・カスニヅィ Agios Nikolaos tou Kasnitzi 聖堂 (図2)、1180年代<sup>(38)</sup>
- ・プリレブ (マケドニア)、聖ニコラオス Sv. Nikola 聖堂 (図3)、1200年頃<sup>(39)</sup>

以上の作例<sup>(40)</sup>の多くは断片的な状態でしか残らず、プログラムの全貌を論ずることが難しい。キプロス島キラ聖堂は唯一初期の作であるが、聖堂全体のプログラムは復元できない。キエフやノヴゴロドに複数の作例が遺るのは、キエフの聖ソフィア大聖堂が発信源となったものであろう。聖ソフィアにおける戦勝祈願が「効いた」ことが大きい、またロシアの丈の高い聖堂アプシスに、聖母の立像がうまく納まったためでもあろう。エーゲ海の島々の小型聖堂では、アプシスの狭いコンクに立像の聖母を描くことはできないのである。しかし聖ソフィアのベーマ天井は剥落してモザイクは現存せず、図像は不明である。キプロス島カコベトリアの例は非常に込めた制作段階をもち、統一的なプログラムを論じることが困難であるし、ムリキが11世紀としたアプシスも私たちに後期の作に思われる。

カストリアは単廊式バシリカ構造を有し、「オランスの聖母」を配したコンクの上には「マンディリオン (聖顔布)」を中央モチーフとする「受胎告知」、その上には胸像形式の「デイス」が描かれた。ドームがない建築なので、東壁頂部にパントクラートル胸像を描き、左右に聖母と洗礼者を加えて「デイス」の機能をもたせたものである。「オランスの聖母」-「パントクラートル」-「デイス」という主題の結合は、ネア・モニの場合と共通する。西壁上部に「昇天」が選ばれており、そこには構図の一部としてオランスの聖母が加えられているから、カストリアのアプシスを「昇天」の一部と見ることはできない。この聖堂では東西壁に相向かい合って「オランスの聖母」が描かれていることになる。

マケドニアのプリレブ、聖ニコラオス聖堂では、1200年頃とされるアプシスにオランスの聖母が描かれる。アプシスを除く東壁は1298年の段階に属し、オリジナルの図像を踏襲しているかどうか不明であるが、現状では東壁頂部に「昇天」が選ばれている。つまりアプシスの「オランスの聖母」直上に、「昇天」の「オランスの聖母」が繰返されることになる。

中期ビザンティン聖堂のアプシス装飾における「オランスの聖母」を考える際のアボリアは、所謂「ブラケルニティッサ Blachernitissa の聖母」<sup>(41)</sup> 問題である。まず混乱を避けるために、本稿における用語の定義を行う。オランスの聖母の単独立像を「オランスの聖母」、オランスの聖母立像の胸に幼児キリストのメダイオンがあるものを「ブラケルニティッサ型聖母」と呼び分ける。聖母の半身像に関しては、オランスであるか否かにかかわらず胸に幼児キリストのメダイオンがあるものを「ニコピア-プラティテラ Nikopioia-Platytera 型聖母」と呼ぶことにする。「オランスの聖母」に「ブラケルニティッサ」との銘が附される場合があり、また「オランス聖母半身像+幼児キリスト・メダイオン」を「プラティテラの聖母」、「幼児キリストのメダイオンを抱

えた聖母半身像」を「ニコピア型聖母」と分けて呼ぶ場合もあるが、ここではそうした呼称を採らない<sup>(42)</sup>。

おそらく私たちに与えられた作例、文献から解決され得ない問題は、2点に集約されよう。1. 「オランスの聖母」と「ブラケルニティッサ型聖母」の関係。なぜ聖母の胸のところに超自然的にキリスト・メダイオンが「浮遊」しているのか。2. 「ニコピアープラティテラ型聖母」は「ブラケルニティッサ型聖母」の下半身を省略した派生形なのか。また聖母のオランスとメダイオンを抱える仕種に意味の違いを読むべきか。

第一の問いに対して。「オランスの聖母」と「ブラケルニティッサ型聖母」はともに、首都コンスタンティノポリスのブラケルネ聖堂を飾っていた主題であり、鉛の印章やコインにしばしば写された。しかしエクフラシスは曖昧で、両図像の前後関係（あるいは並存したのか）は不明である。A・ウェイル＝カーは「胸のところにキリストのメダイオンのあるオランスの聖母は、ビザンティンのイメージ世界に遅れてやってきた」と述べる<sup>(43)</sup>。論理的には、あるいは発展史的には無論そうであろう。メダイオンが胸のところに「浮遊」するオランスの聖母像が先行して、後からメダイオンのない型が生じたとは考えられない。「オランスの聖母」が先行し、何らかの理由によって「ブラケルニティッサ型聖母」という超自然的なタイプが生まれたものに違いない。しかし私たちはその間の事情を知ることができない。

皮肉なことに、近年学界に知られるようになった作例は7世紀の「ニコピアープラティテラ型

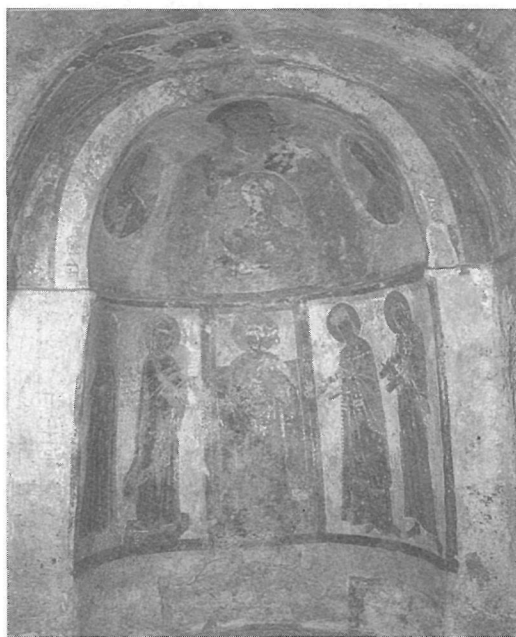


図4 ナクソス島、パナギア・ドロシアニ聖堂北アプシス

聖母」である。「昇天」という説話的な文脈以外で、すなわち「オランスの聖母」単独像でこれより遡る作例は現存しない。ナクソス島ハルキChalki近郊、パナギア・ドロシアニ聖堂は三葉形の不規則なプランをもつ聖堂であるが、北のアプシスに「ニコピアープラティテラ型聖母」を描く（図4）。聖母は手でメダイオンを抱えている<sup>(44)</sup>。聖母の挙措を問題にしなれば、「ブラケルニティッサ型聖母」図像は、イコノクラスム以前から普及していたことが確実であろう。

「ブラケルニティッサ型聖母」の起源となったメディアが板絵イコンであるか、聖堂壁画であるか、あるいは何らかの工芸品であるのかは不明である。しかし聖堂壁画の文脈でこの図像が成立する契機を考えることも可能かもしれな



い。アプシスのコンク周辺にインマヌエルのキリストのメダイオン（ないし半身像）を配する聖堂がいくつか見受けられるからである。プスコフ（ロシア）、ミロズ修道院（1150年代）<sup>(45)</sup>；カストリア（ギリシア）、アギイ・アナルギリ聖堂（1180年代）<sup>(46)</sup>；カストリア、パナギア・マヴリオティッサ修道院（13世紀初頭？）<sup>(47)</sup>、等々。

後期の作例ではあるが、興味深いのはオフリド（マケドニア共和国）のパナギア・ペリブレプトス聖堂（1294/95年）である<sup>(48)</sup>。アプシスはオランスの聖母立像で、コンクに接する逆U字形壁面の頂部、すなわち聖母の頭上にインマヌエルのメダイオンが描かれる（図5）。このように「オランスの聖母」と「インマヌエルのメダイオン」の分離した作例が、何らかの理由によって結合し、ロゴスの神秘的な受肉を表象する「ブラケルニティッサ型聖母」が誕生したのかも知れない。

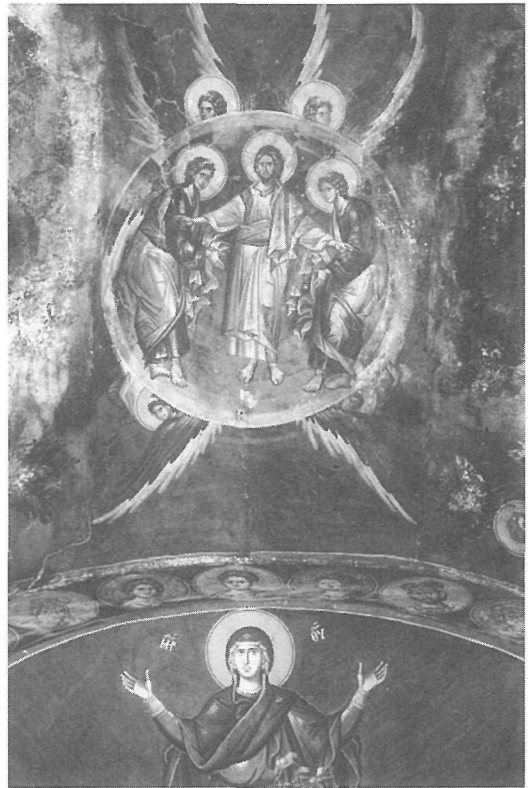


図5 オフリド、パナギア・ペリブレプトス聖堂アプシス

ちなみにオフリドの例では、ベーマ天井に「昇天」、ドームにはパントクラトールの胸像を描く。ベーマ天井の「昇天」は、この時代にはすでに定型と言ってよい。画家<sup>(49)</sup>は、アプシスとドームでメタレヴェルに「昇天」を構成するというプログラムを理解しなかっただろうか。アプシスに描かれたオランスの聖母は、この場合、ベーマ天井の「昇天」を見送っているとも解釈できるので、一概にそうは言えない。マリアに見送られて昇天したキリストは、今は天（ドーム）に在って地上を見下ろす。「空の御座」がないために「再臨」の含意を読みとることは難しいが、アプシスーベーマ天井ードームを併せて、受肉したキリストが帰天する教義を読むことは可能である。

ノヴゴロド（ロシア）近郊ネレディツァの救世主聖堂（1198年）<sup>(50)</sup> もこの文脈で確認しておく。アプシスは「ブラケルニティッサ型聖母」であるが、その上部に「インマヌエルのキリスト」のみならず、「日の老いたる者のキリスト」をも描く。ドームは通常通りパントクラトールである。アプシス最下部の壁面には「祭司キリスト」を中心とする奇妙な「デイシス」が配されており、これまでこの図像の意味は一切不明であった。しかし先述のパナギア・ドロシアニ聖堂の出版によって、初期に遡る先行例が明らかになった。ナクソスの作例では北のアプシス・コンクに「ニ



図6 ナクソス島、アギオス・ゲオルギオス・ディアソリティス聖堂アプシス

コピープラティテラ型聖母」、その下に「祭司キリストのデイス」(同定できない聖女を含む)が置かれている。ここから私たちが推測できるのは、「ブラケルニティッサ型聖母」と「ニコピーアプラティテラ型聖母」が同じ意味を担っていたらうこと、そして「ブラケルニティッサ型聖母」と「祭司キリストのデイス」の結合には何らかの失われた意味があったらうこと、である。

ナクソス島においては、おそらくパナギア・ドロシアニ聖堂の図像が伝播したものであろう、アプシスに「ニコピーアプラティテラ型聖母」を描く例が少なくない。ハルキ村のアギオス・ゲオルギオス・ディアソリティス聖堂(11世紀)<sup>(51)</sup>は、アプシスに「ニコピーアプラティテラ型聖母」(聖母はオランス)、ベーマ天井には「昇天」を描く(図6)。ドーム図像は逸失しているが、バントクラトルであったらう。興味深いのは「昇天」に聖母が描かれていないこ

とである。ヴォールトの南北には使徒各6人、大天使各1人が配されるのみで、聖母が欠けている。「昇天」の証人たるべき聖母の役を、アプシスの聖母が兼ねているものと考えられる。その場合、胸の「インマヌエル・メダイオン」は「昇天」にとって邪魔なようであるが、キリスト受肉の初めと終わりを「ニコピーアプラティテラ型聖母」と「昇天」の結合によって強調したものと積極的に解することも可能であらう。そしてドームには神性の表象たるバントクラトルが君臨する。

かつて「昇天」はドームを占める図像であった。ドームの四分の一球形底部に聖母と二天使、十二使徒を均等に描くことができる。キリストは頭部を西に向けるから、聖母は東側の中軸上、すなわちキリストの足の下に配される。しかし「昇天」の場がベーマ天井のヴォールトに移ると、聖母を中軸上に描くことができなくなる。ヴォールトの幅いっぱいにキリストの光背が置かれ、聖母は北か南の端からキリスト昇天を見送ることになる。構図上の左右相称性が維持できない。しかしアプシスの「オランスの聖母」を「昇天」にとり込むことによって、再びシンメトリーが回復されるのである。

キオス島から始まった旅であったが、最後に訪れるのもやはり島、キプロス島である。トルコ

占領下において日本人の正式訪問がかなわない北キプロス、トリコモTrikomo村のパナギア聖堂を見よう<sup>(52)</sup>。アプシスは大天使を伴わない「ブラケルニティッサ型聖母」で、ベーマ天井が「昇天」である。「昇天」中の聖母の有無は、図版では確認できなかった。ドームはパントクラトールで、東側に「空の御座」を置き、その両側にとりなしの聖母と洗礼者を配して「デシス」としている。アプシスからドームに至る聖堂東西軸上に、「ブラケルニティッサ型聖母」―「昇天」―「空の御座／デシス」―「パントクラトール」という主題群を並べる<sup>(53)</sup>。ナクソス島が「ニコピアーブラティテラ型聖母」のアプシスを多くもつ島である<sup>(54)</sup>なら、キプロス、とくにその北部には「ブラケルニティッサ型聖母」のアプシスが頻出する<sup>(55)</sup>。

13世紀後半以降の所謂後期ビザンティン時代には、アプシス図像として「ニコピアーブラティテラ型聖母」(多くはオランス)がおそらくもっとも頻繁に見られる<sup>(56)</sup>。しかしそこでは、ネア・モニに見られたごとく聖堂空間全体を用いて「キリストの昇天」をメタレヴェルで演出するプログラムはもはや見られない。また「ブラケルニティッサ型聖母」や「ニコピアーブラティテラ型聖母」が一義的に「昇天」と結合しなければならないものでもない。ネア・モニ、そしておそらくは首都のファロスの聖母聖堂に見られた見事なプログラムは、ビザンティン聖堂の装飾プログラムの主流となることはなかったが、その余韻や発展形は多くの聖堂に認められるのである。

#### 注

- (1) 本稿におけるネア・モニのプログラム解釈は辻による。益田は辻との議論を経て、比較作例を選定し、執筆した。益田はこれまでに同じ副題をもつ以下の連作論文を発表してきた。「デシス図像の起源と発展 (I) (II)」『女子美術大学紀要』26 (1996), pp.1-18; 27 (1997), pp.1-20; 「キリスト・パントクラトールのコンテクスト」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』48-3 (2003), pp.39-54; 「アギイ・アナルギリ聖堂 (カストリア) 東壁面のプログラム」『美術史研究』41 (2003), pp.65-80。また以下の益田論文も、本稿と密接に関わっている。「ビザンティン聖堂装飾における『生と死』」; 「ウビシ修道院 (グルジア) の装飾プログラム」林雅彦編『「生と死」の東西文化史』法蔵閣近刊。
- (2) ネア・モニの建築についてはCh.Bouras, *Nea Moni on Chios: History and Architecture*, Athens 1982が、モザイクについてはD.Mouriki, *The Mosaics of Nea Moni on Chios*, Athens 1985が決定版の研究である。
- (3) 辻佐保子「ビザンティン美術の表象世界」(『ビザンティン美術の表象世界』岩波書店 1993年) 22頁。ビザンティン聖堂におけるドーム図像のカタログは以下を参照。N.Γιολέας, *Ο βυζαντινός τρούλλος και το εικονογραφικό του πρόγραμμα*, Athens 1990。
- (4) Mouriki, *Nea Moni*, pp.107-109。
- (5) A.Grabar, *Martyrium*, Paris 1943-46, pp.292-96。現存する作例としてはラヴェンナのサンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂等。Cf. Ch.Ihm, *Die Programme der christlichen Apsismalerei. 4.-8. Jahrhundert*, Stuttgart 1992 (1960), pls. XXVI, 2,3。
- (6) K.Papadopoulos, *Die Wandmalereien des XI. Jahrhunderts in der Kirche ΠΑΝΑΓΙΑ ΤΩΝ ΧΑΛΚΕΩΝ in Thessaloniki*, Graz / Köln 1966。
- (7) リングボムによって提起された問題は、キリスト受難図像を軸にベルティンクに受継がれた。S.Ringbom, *Icon to Narrative. The Rise of the Dramatic Close-Up in Fifteenth-Century Devotional Painting*, Doornspijk 1984<sup>2</sup>; H.Belting, *Das Bild und sein Publikum im Mittelalter. Form und Funktion früher Bildtafeln der Passion*,

Berlin 1981.

- (8) 益田「ビザンティン聖堂装飾における『生と死』」林雅彦編『「生と死」の東西文化史』所収(近刊)。
- (9) 益田「デシス図像の起源と発展(Ⅱ)」p.14.
- (10) 益田「パントクラトールのコンテクスト」p.47.
- (11) 9世紀までの昇天図像の集大成として、以下参照。N.Γκιολές, *Η Ανάληψις του Χριστού βάσει των μνημειών της Α' χιλιετηρίδος*, diss., Athens 1981.
- (12) 益田「パントクラトールのコンテクスト」pp.47f..
- (13) Mouriki, *op.cit.*, p.109.
- (14) *Loc.cit.*
- (15) 益田「デシス図像の起源と発展(Ⅱ)」pp.5ff..
- (16) Laourdas, *Φοτίου Ομιλίες*, Thessaloniki 1959, p.102; C. Mango, *The Homilies of Photius Patriarch of Constantinople*, Harvard University 1958, pp.187f.; C.Mango, *The Art of the Byzantine Empire 312- 1453*, Englewood Cliffs, N.J. 1972 (rep. 1986), pp.185f..
- (17) Pharosの聖母聖堂については以下参照。J.Ebersolt, *Le grand palais de Constantinople*, Paris 1910, pp.104-9; R.Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin. 1er partie: Le siège de Constantinople et le patriarcat oecuménique. Tome III, Le églises et les monastères*, Paris 1969<sup>2</sup>, pp.232-6.
- (18) R.J.H.Jenkins and C. Mango, "The Date and Significance of the Tenth Homily of Photius," *Dumbarton Oaks Papers* 9-10 (1956), pp.123-40; Mango, *Homilies of Photius*, pp.177-183; Ihm, *op.cit.*, p.63.
- (19) Mango, *Homilies of Photius*, p.181.
- (20) 現存する聖堂建築では、イスタンブールのコーラ修道院(カリエ・ジャミイ)のドームが、カボチャ様のくぼみをつくって、そこにキリストの先祖たちを描いている。
- (21) Mango, *Homilies of Photius*, pp.182f..
- (22) *Ibid.*, p.183.
- (23) 益田「アギイ・アナルギリ聖堂(カストリア)東壁面のプログラム」参照。
- (24) 益田「パントクラトールのコンテクスト」参照。
- (25) O.Demus, *Byzantine Mosaic Decoration*, London 1948, pp.17ff..
- (26) カップアドキア、グルジア等に作例が多く見出される。カップアドキアについてはジョリヴェ=レヴィを、グルジアについてはヴェルマンスを参照。C. Jolivet-Levy, *Les églises byzantines de Cappadoce. Le programme iconographique de l'abside et des ses abords*, Paris 1991; T. Velmans, "L'image de la Déisis dans les églises de Géorgie et dans celles d'autre régions du monde byzantin," *Cahiers Archéologique*, 29 (1980-81), pp.47-102 (rep.in: *L'Art médiéval de l'Orient chrétien. Recueil d'études*, Paris / Sofia 2002).
- (27) カップアドキアに多い。前掲ジョリヴェ=レヴィ参照。
- (28) ギリシアに残る中期の聖堂のプログラム概観としては、以下を参照。K.M.Skawran, *The Development of Middle Byzantine Fresco Painting in Greece*, Pretoria 1982, esp.pp.17ff..
- (29) 単独像として「オランスの聖母」は10世紀以降、コイン、鉛製印章、大理石浮彫等にも広く用いられるようになった。しかしこうした作例はプログラムとしての文脈をもたないので、本稿では深く立ち入ることはしない。大理石浮彫のオランスの聖母は多数制作されたが、最も著名なのはイスタンブール、ギュルハネ出土の所謂「マンガナの聖母」である。R. Demangel and E.Mamboury, *Le quartier des Manganes et la première région de Constantinople*, Paris 1939, pp.155ff.. ブラケルネ聖堂の聖母イコンから奇跡の泉が湧き出したとの伝説によって、浮彫の「オランスの聖母」はしばしば掌や膝から水が噴出する泉水施設として機能した。A.Grabar, *Scultures byzantines du moyen âge, II (XIe-XIVe siècle)*, Paris 1976, pls. I - II; *Splendeur de Byzance, exhib.cat.*, Bruxelles 1982, Sc.10, p.84; R.Lange, *Die byzantinische Reliefkone*, Recklinghausen 1964, figs.1, 47; K.Loverdou- Tsigarida, "The Mother of God in Sculpture," in: M.Vassilaki (ed.), *Mother*

of God. *Representations of the Virgin in Byzantine Art*, Benaki Museum, Athens 2000, pp.237ff.. 現在オランスの聖母とミカエルのパネルのみが残っている、コンスタンティノポリス、ペリブレプトス修道院出の大理石板も、かつてはガブリエル・パネルが存在したはずである。H.C.Evans and W.D.Wixom (eds.), *The Glory of Byzantium. Art and Culture of the Middle Byzantine Era A.D.843-1261*, the Metropolitan Museum of Art 1997, no.12, pp.45f.. (no.291, pp.450ff..もオランスの聖母。) ; Vassilaki (ed.), *Mother of God*, no.37, pp.354f..

- (30) A.H.S. Megaw and E.J.W. Hawkins, "A Fragmentary Mosaic of the Orant Virgin in Cyprus," *Actes du XIVe congrès international des études Byzantines*, Bucarest 1971, III, Bucarest 1976, pp.363-66; Ihm, *op.cit.*, pp.243f..
- (31) 註16参照。
- (32) ロシア初の石造建築で、ウラジーミル大公によって建立されるが、1240年に崩落。  
V.Lazarev, *Old Russian Murals and Mosaics from the XI to the XVI Century*, London, 1966, p.31, p.215 n.83.
- (33) 文献: T.Malmquist, *Byzantine 12<sup>th</sup> Century Frescoes in Kastoria*, Uppsala 1979, p.111, no II-2.
- (34) H.Logvin, *Kiev's Hagia Sophia*, Kiev 1971, figs.12-13; Malmquist, *op.cit.*, pp.148ff., no.VI-1.
- (35) Lazarev, *op.cit.*, p.68.
- (36) V.Lazarev, "I mosaici della chiesa dell'Arcangelo Michele in Kiev," *Felix Ravenna*, 96 (1968), pp.113ff..
- (37) Lazarev, *op.cit.* (n.32), p.95; Malmquist, *op.cit.*, p.151, no.VI-6.
- (38) S.Pelekanidis, M.Chatzidakis, *Kastoria (Byzantine Art in Greece)*, Athens 1984, pp.50ff.; Malmquist, *op.cit.*.
- (39) V.Djurić, *Byzantinische Fresken in Jugoslawien*, München 1976, p.19, fig.10.
- (40) アブシスのコンクを二段に分割して、下部にオランスの聖母、上部に「キリストの顕現(マイエスタス・ドミニ)」を描くことによって「昇天=再臨」を表す作例はここに含めなかった。パウイト(エジプト)のアポロン修道院第17礼拝堂、ローマ、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂サン・ヴェナンツィオ礼拝堂等。Ihm, *op.cit.*, pl.XXIII, 1,2; 辻佐保子「エゼキエルとイザヤの幻想」、前掲『ビザンティン美術の表象世界』所収、p.59。またリストにシチリア、パレルモの聖堂を加えることも可能である。チェファルー大聖堂ではアブシスのコンクにパントクラトールの半身像を置き、その下部中央にオランスの聖母を配する。これはネア・モニのプログラムをバシリカ式聖堂に適用させたものと考えられる。カペッラ・パラティーナのアブシス・コンクはパントクラトールだが、下部の聖母子坐像は後代のもの。モンレアレでは、アブシス・コンクのパントクラトールの下部は坐像の聖母子。アブシス図像の遺っていないラ・マルトラーナを除く3聖堂は、いずれもベーマ天井に「空の御座」のメダイオンを描く。したがってチェファルーでは「オランスの聖母」-「パントクラトール」-「空の御座」という、ネア・モニと同じ主題の結合が見られる。O.Demus, *The Mosaics of Norman Sicily*, New York 1988 (London 1949); V.Lazarev, "The Mosaics of Cefalu," *rep.in: Studies in Byzantine Painting*, London 1995, pp.103ff..  
さらにラ・マルトラーナのドームに図像・様式ともに近いメガラ(ギリシア)のアギオス・イエロテオス聖堂では、ドーム中央に坐像のパントクラトールを置き、東側に「空の御座」のメダイオン、西側には胸のところで掌をこちらに向ける聖母胸像のメダイオンを配する。オランスの聖母はメダイオン枠に納まらないので、掌を胸のところに移したものであろう。したがってここにも「空の御座」-「パントクラトール」-「オランスの聖母」の主題結合が認められる。D.Mouriki (Ντ.Μουρίκη), "Ο ζωγραφικός διάκοσμος του τρούλλου του Αγίου Ιεροθέου κοντά στα Μέγαρα," *Αρχαιολογικά Ανάλεκτα ἐξ Ἀθηνών*, II, I (1978), pp.115ff.; E.Kitzinger, *The Mosaics of St.Mary's of the Admiral in Palermo*, Washington, D.C., 1990, pp.125ff..
- (41) C.Belting-Ihm, *Sub matris tutela*, *Untersuchungen zur Vorgeschichte der Schutzmantelmadonna*, Heidelberg 1976, esp.pp.38ff..
- (42) ビザンティン美術において、作品の図像学的な型と、それに附された銘文とが喰い違うことはしばしばある。例えば後述する11世紀の首都、ブラケルネ聖堂には、イエスが母に頬ずりをする所謂「エレウサ型」

- の聖母子イコンが所蔵されており、そこには「ブラケルニティッサ」との銘が附されていたと考えられる。
- C.Angelidi and T.Papamastorakis, "Picturing the Spiritual Protector: from Blachernitissa to Hodegetria," in: M.Vassilaki (ed.), *Images of the Mother of God. Perceptions of the Theotokos in Byzantium*, Aldershot 2005, pp.214f.. 本稿では銘文ではなく、図像学上の通称を問題とする。
- (43) A.Weyl Carr, L.J.Morrocco, *A Byzantine Masterpiece Recovered, the Thirteenth-Century Murals of Lysi, Cyprus*, University of Texas 1991, p.43.
- (44) N.B.Δρανδάκης, *Οι παλαιοχριστιανικές τοιχογραφίες στη Δροσιανή της Νάξου*, Athens 1988, pl.VII; Id., "Παναγία η Δροσιανή," *Νάξος (Βυζαντινή τέχνη στην Ελλάδα)*, Athens 1989, pp.18ff., fig.8.
- (45) V. Sarabianov, *Transfiguration Cathedral of the Mirozh Monastery*, Moscow 2002.
- (46) Pelekanidis, Chatzidakis, *Kastoria*, pp.22ff.; Malmquist, *op.cit.*.
- (47) Pelekanidis, Chatzidakis, *Kastoria*, pp.66ff..
- (48) 創建当初はパナギア・ペリブレプトスに献堂されていたが、中世以来Sv.Klimentに再献堂された。しかし近年聖クリメントの聖遺物が新しい主教座聖堂にトランスラティオされ、再び聖母聖堂に復帰した。
- (49) この場合ミハイルとエウティキオスという固有名詞が伝わっている。P. Miljković-Peppek, *L'oeuvre des peintres Michel et Eutych*, Skopje 1967 (in Macedonian) ; H. Hallensleben, *Die Malerschule des Königs Milutin*, Gießen 1963.
- (50) Н.В. Пивоварова, *Фрески Церкви Спаса на Нередице в Навгополе*, Sankt Peterburg 2002.
- (51) Μ.Αχειμάστου-Ποταμιάνου, "Άγιος Γεώργιος ο Διασώριτης," *Νάξος (op.cit.)*, pp.66ff., fig.4;  
Γ.Δημητροκάλλης, *Συμβολαί εις την μελέτην των βυζαντινών μνημείων της Νάξου*, vol.1, Athens 1972, pp.29ff.; Γ.Σ.Μαστορόπουλος, *Νάξος. Το άλλο κάλλος. Περιηγήσεις σε βυζαντινά μνημεία*, Athens 2006, pp.166ff.. マストロプロスの新著は、ナクソス島の全ビザンティン聖堂を概観した重要な成果である。
- (52) A.Papageorgiou, *Masterpieces of the Byzantine Art of Cyprus*, Nicosia 1965; A. and J. Stylianou, *Painted Churches in Cyprus*, London 1985, pp.486ff.; Weyl Carr, Morrocco, *A Byzantine Masterpiece (n.43)*, pp.44ff..
- (53) ベーマの「昇天」が残らないものの、このプログラムはキプロス東部のリシLysi村、アギオス・テモニアノス聖堂(13世紀)でも繰返された。Weyl Carr, Morrocco, *A Byzantine Masterpiece*, p.44.
- (54) 上掲以外にAgios Nikolaos (Sangri), Panagia stis Giallous, Theoskepasti (Chalki), Agios Konstantinos (Vourvouria) 等。未発表の聖堂が多く、今後の研究で数は増えるであろう。
- (55) ウェイル=カーはTrikomoとLysiの他、Panagia Apsinthiotissa, Agii Apostoli (Perachorio), Agia Maura (Rizokarpasso), Christos Antiphonitis (Kalogrea) を挙げる。Weyl Carr, Morrocco, *A Byzantine Masterpiece*, p.44.
- (56) 後期聖堂における「ブラティテラ」型聖母の率は、例えばクレタ島を網羅的に扱うスパトラキスの以下の著作の索引で、(Virgin) Platyteraを引けばわかる。I.Spatharakis, *Byzantine Wall Paintings of Crete, vol.1, Rethymnon Province*, London 1999; Id., *Dated Byzantine Wall Paintings of Crete*, Leiden 2001.

※図版はすべて筆者撮影による。